

相談支援係
072-941-3365

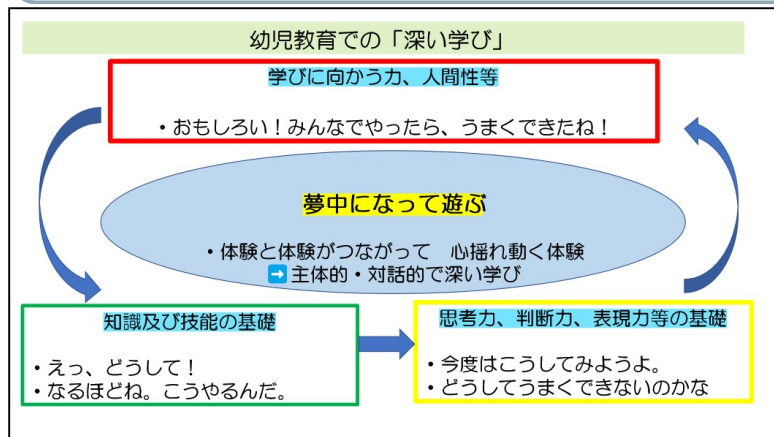
ICT教育推進係
072-943-5785

研究研修・幼児教育係
072-943-5784

教育センター
Web page は
こちらから



第1回 幼・保・こ・小合同研修会



令和7年5月23日（金）午後3時～午後5時に、第1回 幼・保・こ・小合同研修会を八尾市文化会館（プリズムホール）で行いました。講師は大阪総合保育大学 神長 美津子 特任教授で、研修テーマは「幼児教育と小学校教育の円滑な接続のために ～子どもの育ちや学びを知り、気づく～」です。

← 研修使用資料

<受講者感想>

- ・小学校入学までに積み上げてきたものが入学後に繋がっているということを改めて感じた。「遊ぶ中で学ぶ」を大切にして学習につなげていきたい。
- ・目に見える力ばかりにとらわれそうだが、目に見えない力を育てていけるよう、感受性を高めていきたい。
- ・植物を育てる話が印象に残った。うまくいかないことを楽しみ、そこからなぜだろうと考えることが、主体的に考えることだと思った。
- ・就学前施設では、子どもが興味をもっていることに寄り添い、「心が揺れ動く瞬間」を大切にできる心もち、視点をもっておきたいと改めて思った。

ICT 教育担当者研修①

【ソフトウェアや情報機器の管理と保守に関わる業務について】

- ① 1人1台端末の管理について
- ② アカウントの管理について
- ③ ICT機器の破損・故障等について
- ④ 不具合対応とよくあるQ&Aについて

令和7年5月29日（木）午後3時30分～午後5時に ICT教育担当者研修①を行いました。前半は本センター 戸田 智規 指導主事より「ICT 担当者としてソフトウェアや情報機器の管理と保守に関わる業務について」と題しての伝達、後半は 株式会社アーテック 担当者様より「プログラミング教育の授業づくりについて」と題して講義がありました。



しょうがっこう
小学校プログラミング応用セット

年 組 名前

やってみよう！
防災用ライトをつくろう

ゆれを感じたときに、LEDを点灯させるプログラムをつくりましょう。

災害から身を守るためのプログラム

様々なところで使われているプログラムですが、災害から身を守るしくみにも使われています。たとえば、防災用のライトはいつも消灯していますが、地震が発生したときには点灯し、ひななるときの目印になっています。これは、防災用ライトの中にゆれたかどうかを調べるセンサーが入っていて、大きなゆれ（地震）を感じたときだけ電流を流し、点灯させるプログラムが使われています。

そのほかにも、電気ストーブは大きなゆれを感じたときに電源をきって火事にならないようにするなど、様々な防災の仕組みにプログラムが使われています。




使うセンサー

() センサー

センサーがゆざぶられているかどうか、センサーがどの向きに傾いているかを調べます。

プログラムの動き



使うブロック

LEDを点灯

LEDを消灯

イベント

調べる

制御

もし...なら

でなければ

ずっと

調べてみよう

身の回りにある防災のしくみを探そう

■ 私たちの身近にある電気を使った製品の中で、災害から身を守るしくみを使っているものを調べて、下の表にまとめよう。

製品	しくみ
例) 電気ストーブ	加熱しているときにゆれを感じたら、火事にならないように電気を止める。

ポイント

くりかえし確認したいブロックは、で囲みましょう。





灰色のかけがえがでたら、手をはなす

<受講者感想>

- 今回の研修を通して、アカウント管理の方法や児童用端末の修理対応の流れについて理解を深めることができた。不具合対応についても具体的に整理されており、今後は学校内で故障状況を適切に精査し、必要に応じてICT支援員の方の力も借りながら対応していくことの重要性を再認識した。
- 紹介されたプログラミングツールは、理科などの授業内だけでなく、パソコンクラブ内でも使えそうだと感じた。特に対象のブロックをつなげるだけで機能が拡張できるという点は、児童にとっても直感的に操作でき、頭の中で考えたことが実行しやすそうであった。そのような中で、児童がプログラミングに親しみやすくなるよう、教具も使いながら工夫していきたいと思った。
- 防災プログラミングは避難訓練等の事前学習に役立ちそうな内容なので、ぜひ学校全体で使っていけるように広めたいと思った。

通級指導教室公開授業研修会①

令和7年5月30日（金）午前9時30分～午前11時30分に通級指導教室公開授業研修会①を行いました。前半は事例検討会（グループ交流）を行いました。後半は発達支援ルームまなび 今村 佐智子 理事より公開授業校の事例について指導助言をいただきました。

<受講者感想>

- 自校の事例を提供させていただいて、様々なアドバイスや意見を聞くことができて、とても参考になりました。グループワークを行うときに使ったワークシートは、指導の視点や流れを考える上で大いに役立った。今村先生からはアセスメントの視点を教えていただくことができた。
- 面倒なことはやりたくない、「マイナス言葉」を連発する子どもに対して、課題を少なくしてみてもどうか、「マイナス言葉は使わない」という掲示をしてみてもどうかなどのアドバイスをいただくことができた。早速実践してみようと思う。
- 前半のグループワークでは、指導目標の達成に向けた教材について具体的なアイデアをいただくことができた。特にアンガーコントロールの指導や SST に関する教材はすぐに役立て

ることができそうである。今村先生の講義では、アセスメントシートは児童の困り感を把握するための第一段階のもので、そこからスクリーニングテストや観察をして根本はどこに繋がっているのか探っていくことが大切で、その上で教材を選ぶことが大切であると分かった。

幼児教育研修＜初任ステージ研修①＞

「保育者の指示どおりにできる」
「みんなと同じようにできる」



「それぞれが興味・関心にもとづいて遊びを深める」
「それぞれの姿や思いを認め合う」

↑ 研修使用資料

令和7年6月4日（水）午後3時～午後5時に幼児教育研修＜初任ステージ研修①＞を八尾水道センター4階大会議室で行いました。講師は四天王寺大学 門谷 真希 准教授で、研修テーマは「こども理解 子どもの姿や遊びから子どもを理解しよう～子どもを見取るってどういうこと？～」です。

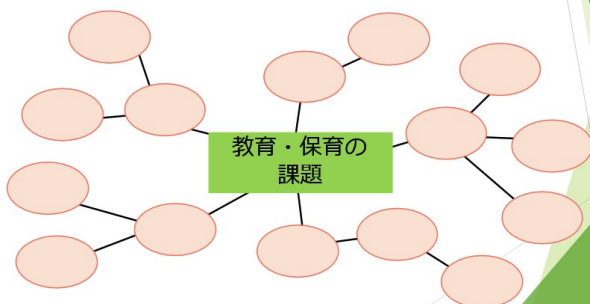
＜受講者感想＞

- 動画を観て、自分だけでは気づかなかったことがいっぱいあった。その後のグループワークでは、他の保育者と話すことでたくさんの気づきがあった。日々の保育の中でも、同じクラスの先生と振り返る時間を大切にしていきたい。
- 「保育者の役割」を理解し、それを踏まえて保育を実践していくことで、子どもたちが主体的に遊び、安心・安全の環境の中で「遊び込む」ことができるということが分かった。
- 振り返りの際に、関わりが少なかった子どもにも話題を回す力がつく、子どもの自信、遊びの広がり、子どもの交流につながると実感した。

幼児教育アドバイザーフォローアップ研修①

企画・立案をはじめましょう

○課題の把握（イメージマップを用いて）



令和7年6月5日（木）午後3時～午後5時に幼児教育アドバイザーフォローアップ研修①を行いました。講師は本センター 天野 千晶 所長補佐で、研修テーマは「研修の企画・立案について 企画・立案①：課題把握と研修内容」です。

← 研修使用資料

＜受講者感想＞

- 日々現場で思っていることを、少人数で話しやすい雰囲気の中で受講でき、自分の考えを述べ合うことができた。「明日からやってみよう」「頑張ろう」と思ってもらえる内容を考えていた。
- 職員の学びにつながることを考えることは人材育成に直結するので、園全体のレベルアップにつながるということが実感できた。楽しみながら学べるような研修を作っていきたい。
- 研修を1から作り上げるということは、悩みながらの作業ではあるが、参加者同士のコミュニケーションを通じて練り上げていくことそれ自体が素晴らしい研修だと感じた。

幼児教育研修＜地域連携研修＞



令和7年6月11日（水）午後3時～午後5時に幼児教育研修＜地域連携研修＞を行いました。講師は和歌山大学 丁子（ちょうじ） かおる 准教授で、研修テーマは「幼保こ小接続はじめの一步～造形・図工でつながる育ちと学び～」です。

←研修使用資料

＜受講者感想＞

・小学校との接続で大切なことは、幼児期に様々な素材や用具に触れさせて、「これ、したことある！」「これ、楽しいの知ってる！」と

自信を持たせることだと聞き納得することができた。

- ・造形は正解がないからこそ、みんなを褒めることができるし、一人ひとりがのびのびと表現できるように環境を整えていきたい。
- ・小学校教育との壁を感じることはあるが、今日の研修を通じて小学校の先生方に幼児期の大切さ、保育のねらいを広く知ってもらえる方法を学べた気がした。

小中一貫教育担当者研修①



↑研修使用資料

令和7年6月13日（金）午後3時30分～午後5時に小中一貫教育担当者研修①を行いました。前半の講師は非認知能力キャリア教育アドバイザー 東口 るみ さんで、研修テーマは「小中一貫教育における非認知能力」です。後半の講師は本センター 生田 祐敬 指導主事で、研修テーマは「各中学校区における非認知能力の育成について ～令和6年度 八尾市小中一貫教育推進にかかる児童生徒アンケートより～」です。

＜受講者感想＞

- ・子どもの言動に対して大人が意味づけをし、それを伝えることが重要であると学びました。また、こちらの日頃の声かけや実践も、非認知能力を育てるタネになっていることもよく理解できた。否定や決めつけの声かけではなく、認める声かけを続けていくためにも、ゆとりをもって子どもと接することができる環境がたいせつだと感じた。
- ・非認知能力を詳細に教えていただいた。やりぬく力、自己肯定感、自己効力感、自制心、回復力等々、教師側がまず具体的理解を図ることが大切だと感じた。また、お話の中にもあったように、数値化できない力であるからこそ意識化・言語化していくことが、この力を育てるためには重要なことだと思う。
- ・今日の講義を聞いて子どもたちの一つひとつの行動や発言に非認知能力を育てる種があることがわかり、すぐにでも実践していきたいと思った。一番心に残っていることは非認知能力を伸ばすために「質問を未来に向ける」ことである。どうしても、指導や注意をする際にダメなところを指摘しがちだが、次の行動について考えさせることが脳への刺激に大きなはたらきかけをすることが大切だとわかったので、今後意識していきたいと思いました。

通級指導教室担当者会③

令和7年6月13日（金）午前9時30分～午前11時30分に通級指導教室担当者会③を行いました。前半は実践交流会を行いました。後半は発達支援ルーム まなび 今村 佐智子 理事より「読む・書くの指導」と題して講義していただきました。

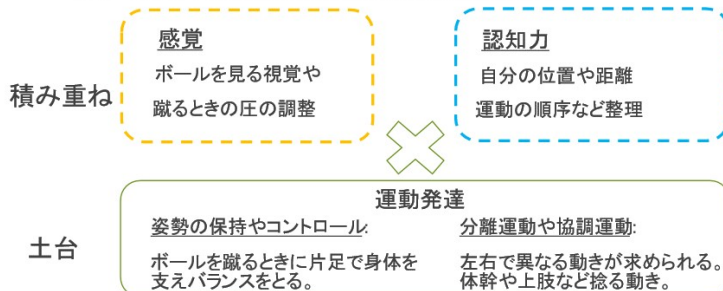
<受講者感想>

- ・実践交流会は、初めての担当者の質問に対して通級指導教室を複数年担当している教員がそれぞれ自分自身の実践を紹介し、そこを切り口に話が深めていくことができた。同じことをしていても、様々な視点やねらいがあるということが具体的に理解することができた。
- ・児童の「書く」の誤りを分析し、そこから適切な支援へとつなげる考え方は、実践に直結するもので有効であると考えた。
- ・通級指導のゴールを考えた時、漢字を覚えるための学習を行うのではなく、漢字を覚えるために自分にはどのような学習方法が向いているのか、見つけることが大切であるということが分かった。

特別支援教育・保育ゼミ 全体研修①

③その他の発達について

例.ボールを上手に蹴るために、どんな能力が必要でしょうか。



令和7年6月16日（月）午後3時～午後5時に特別支援教育・保育ゼミ 全体研修①を行いました。講師は八尾市立児童発達支援第1センター作業療法士 岸本和也 さんで、研修テーマは「運動が苦手な子どもへの支援の視点と方法について」です。

↑ 研修使用資料

<受講者感想>

- ・日々の保育をする中で、姿勢や体の使い方、動きが気になる子どもの実際の姿を当てはめながら講義を受けることができた。単に体幹が弱いと思っていたような場合でも、さらによく見て、課題がどこにあるのかを見出していきたいと思った。
- ・今日の研修を受けて、まずは保育者と一緒に安心できる環境の中で、つかまる、すべる、まわるといった全身運動を促す遊びを取り入れ、少しずつゆっくりと経験を積み重ねていけたらと思う。
- ・乳児期から傾向があるということが分かった。乳児のクラスから一人ひとりの発達を記録し全職員で連携して見守りを続けていきたい。

幼児教育研修<保育のための基本研修①>

これらの動作にこだわらず
様々な動作を引き出す工夫が重要



令和7年6月24日（火）午後3時～午後5時に幼児教育研修<保育のための基本研修①>を八尾市立南山本せせらぎこども園遊戯室で行いました。講師は大阪青山大学 村田 トオル 教授で、研修テーマは「実技（運動遊び）：子どものやりたい！を育てる運動遊び～自己肯定感を高める保育者のかかわり～」です。

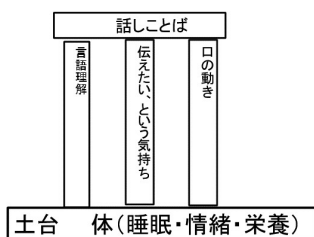
← 研修使用資料

＜受講者感想＞

- ・「子どもを信じましょう！」という言葉がとても心に残りました。子どもがやりたいと思える環境を整えることと同時に保育者の人的環境がいかに大事かということを今回の研修を通して改めて感じた。
- ・子どもたちが積極的・意欲的に遊びに参加することはとても難しいことだと最初は感じていたが、研修を受講して、工夫すれば自分にもできそうだと思うようになった。明日からの保育で実践していきたい。
- ・動きを分解することで、次はどんな動きを取り入れて展開していくか考えることができるので、運動遊びをする時には、今日学んだことをしっかり取り入れていきたい。

特別支援教育・保育ゼミ 全体研修②

ことばは3つの柱からできている



令和7年6月30日(月)午後3時～午後5時に特別支援教育・保育ゼミ 全体研修②を八尾市立青少年センターで行いました。講師は八尾市立児童発達支援第1センター言語聴覚士 奥野 真理子 さんで、研修テーマは「乳幼児の言語発達及び摂食機能について」です。

←研修使用資料

＜受講者感想＞

- ・大人が教えたいものに無理に注意を向けさせるのではなく、子どもが注意を向けているものについて話しかける、ということが大切であるということが分かった。園に持ち帰って他の保育者も伝え、みんなで実践していきたい。
- ・「ことばは分かっているからこそ言える」ということと「伝えたい気持ちがあるから話す」ということが心に残った。
- ・口腔容積は自分で実際に体験することで、一口の量を実感することができた。これからは個に応じた一口分を意識していきたい。

教育センター「情報公開コーナー」

教育センターB棟(東側)の2階に「情報公開コーナー」があります。各種教育関係図書・雑誌等を配架しています。もちろん「教科書センター」として八尾市で採択している教科書や他社の教科書もあります。研修等で来所された時に直接ご覧いただければ幸いです。教科書・その他書籍・雑誌等も2週間の貸し出しを行っております。今回は6月から7月に配架した雑誌の誌名と目次の一部と書籍の内容を紹介いたします。

「指導と評価」(日本教育評価研究会)7月号

- ・特集1 教育・心理検査の効果的な活用
- ・特集2 不登校の子どもの学びの場

「こころの科学」(日本評論社)No.242 2025,7, Jul

- ・特別企画 「支援なんていない！」本人・家族の思い、支援者の葛藤

「道徳教育」(明治図書)7月号

- ・「話し合い」で子どもの本音をどう引き出す？

「特別支援教育研究」（全日本特別支援教育研究連盟編集・東洋館出版社）7月号

- ・特集 「各教科等を合わせた指導」の本質
～合わせた指導だからこそできる授業づくり～

「初等教育資料」（文部科学省編集・東洋館出版社）7月号

- ・特集Ⅰ 防災教育の充実
- ・特集Ⅱ 「総合的な学習の時間」 デジタル学習基盤の活用による質の高い探究的な学び

「中等教育資料」（文部科学省編集・学事出版）7月号

- ・特集 学び・遊びの本質とは！？
～ワクワク！：“創”と“知”の循環～

教育科学「国語教育」（明治図書）7月号

- ・特集 まるごとわかる！説明文・文学の「発問」図解

教育科学「社会科教育」（明治図書）7月号

- ・特集 子どもが主役になる 問題解決型学習 熱中教材20選

書籍：「八尾市史」（八尾市）

八尾飛行場

八尾には八尾飛行場があります。かつては大正飛行場と呼ばれていました。ということはできたのは大正時代か、と思われがちですが、昭和になってからです。できた場所が大正村だったからだそうです。

もともと、大正飛行場には、民間の飛行学校である阪神飛行学校がありました。第二次世界大戦が始まると昭和15年（1940年）に日本陸軍が阪神飛行学校を接收し、防空飛行場に位置付けて拡張に着手しました。その結果、志紀村・柏原村・長吉村にまで広がりました。農地買収や拡張工事など、当時の様子についても述べられています。飛行場以外にも飛行機を空襲から守るための格納庫（掩体壕：えんたいごう）は40基余り建設され、そのうちの一つは八尾市垣内に現存しています。さらに、大正飛行場に隣接して、現在の八尾市西木の本町から長吉（大阪市平野区）にまたがって航空機の整備・補給・修理を目的とした大阪陸軍航空廠が設置されました。こうした施設の存在もあり、昭和20年（1945年）になると、八尾市域は数度にわたる空襲を受け、建物の損壊だけでなく、死傷者が出るなど大きな被害がありました。

昭和20年（1945年）8月にポツダム宣言を受諾した日本は敗戦国となり、9月にはアメリカ軍の進駐が始まりました。大正飛行場も連合国軍に接收されました。しかし、その使用頻度は高くなかったようです。昭和29年（1954年）には連合軍より返還され、昭和31年（1956年）に空港の名称は八尾飛行場となり民間航空基地になりました。飛行場には毎日、読売、産経、朝日の新聞社のほか、遊覧飛行などを行う商業航空3社、さらに陸上自衛隊第三航空隊の基地として利用されることになりました。

八尾市南部地域は飛行場によって分断され、地下道（全長 250m）によって通行できるのみでしたが、騒音や排ガス被害の被害を被っていました。地下道は通学路としても利用されていたので、大正の三校園とPTAなどの再三の訴えによって、昭和46年（1971年）、空港内誘導路に“専用通学路”が設置されました。昭和59年には空港西側にあったく空港事務所や格納庫などが東側の滑走路周辺に移転したことに伴い、大阪府は道路を平面道路に付け替えることを決定しました。地下道は不要になり、八尾市は、地下道を周辺地域の浸水対策に再利用しました。大雨の時に地下の貯留槽に雨水を貯めて後で大正川に排水するというものでした。このような経緯で、いわゆる「八尾空港西側跡地」が誕生することになりました。八尾市のホームページによると、その利用方法について平成22年から「八尾空港西側跡地検討会議」において検討されています。

（葭仲）

書籍：「バケモンの涙」歌川たいじ著

（文庫本では「いとはんのポン菓子」に改題（光文社文庫））

太平洋戦争の末期に、ポン菓子の機械製作を志し、単身北九州に赴いて実際にポン菓子機械の製作を成功させました。この本の主人公は実在する八尾市出身の女性の話です。彼女は代用教員として八尾市内の小学校に勤務する中で、食糧不足の上に調理のための燃料もなく、消化不良を起こして下痢をする児童の様子に心を痛め、少ない米と燃料でポン菓子を作って子どもたちに食べさせたいと思ったのです。北九州に向かったのは、この時期でも鉄がありそうだったからです。現代のように、お金さえ出せば物が手に入る時代ではありませんでした。様々な人との出会い、苦労を経てポン菓子製造機械を完成させたのです。上記八尾空港と直接の関係はありませんが、戦争末期、八尾の物語です。（葭仲）